

# ハッピー・バースデー

椎 名 利(化工会)

『還暦を祝う同期会のお知らせ S 高校有志』の通知を受け取ったとき、私は前回出席したのは何時だったか思い出せなかった。二三友人の出席を確かめ出席することにした。この歳になると昔の友達に会えるのが不思議に気持ちを高揚させた。

今から語るのは、私、水野哲だが、牧原雅代の物語だと言われるかもしれない。なぜなら、三十数年ぶりに彼女と出会ったことから、私が語ろうと思いついたのだから。

それはすべて同窓会から始まった。

その日の同窓会の会場は卒業生のおよそ半数、一五〇人ほどの人で埋め尽くされ盛会だった。すっかり体型の変わっている者も多いが、しばらく見ていると、名札に書かれた名前を思い出すことができた。中に当時のマドンナたちも数名いた。昭和二七年高校に入学した当時、一割にも満たない数で、皆から大事にされていたから、今でも大勢の人に囲まれる人気ぶりだ。

中でも人気ナンバーワンは、牧原雅代、旧姓大山雅代だった。

「彼女離婚して、N保険の勧誘員らしいが、保険のおばさんって、すごいんだね。ベンツに乗っているよ」と、言った噂を聞いたことがある。

私は、久しぶりに見た雅代と話したいと思い機会を見つけていたが、学生当時からマドンナとして人気のあった彼女は皆の輪から外れることはなかった。時々、彼女は背を曲げて笑うような大げさなジェスチャーで皆と話している。

私も久しく出席していなかったためか皆に話しかけられた。懐かしい人ばかりで、忘れていた昔話を思い出させてくれる。会う奴ごとに「やあやあ」と乾杯していると結構アルコールも回ってくる。

トイレにたち済ませて廊下に出ると、煙草を吸っている雅代と出会った。ベージュのジャケットにロング・スカートのスリムな彼女は昔と体形はあまり変わっていなかった。髪は昔のように少しちじれている。ブランド物と思われるジャケット、ネックレス、ブレスレットをつけた彼女には昔のような少女の可憐さは残っていなかった。

私を待っていたのか、煙草を揉み消すと

「ね、久しぶりね。今夜この後付き合ってくださいませんか？」

私がうなずくと、人に聞かれるのを警戒するかに周りに目をやると

「Sホテルの最上階のバーで九時ごろ」と言うと、私の返事を確認することもせずに離れていった。

約束の場所に着くと、彼女はすでに窓際のテーブルに座っていた。雅代はギブレット、私はバーボンのロックで「初恋の人との再会を祝して……」と、おどけて杯をあげると、

「それほんと？」と、流し目で私を見つめた。

「私もあなたが撮って大きく引き伸ばしてくれた写真、今でも大切に持っているわ」と応えた。

あれは大学に入学した初夏、——昭和三十年——第一回の同窓会、と言うよりクラス会での出会いだった。

私は、志望通りP大に合格しその記念に買ってもらったキャノンを自慢げに持って会に臨み、皆の写真撮ったのだった。

その写真に、雅代は大変丁寧な返事をくれたのがきっかけだった。

私は、大学に入ると写真部に入り写真にのめりこみ、目標を女性のポートレートと定めるとモデル撮影会に出掛けていたが、大勢が囲むモデルを撮る陣取り合戦はなかなか熾烈で、場慣れしない私などはいつも離れた所から撮るのが精いっぱいだった。

高校時代は容易に話しかけることもできなかった私だったが、その手紙は私に勇気を与えてくれ、早速彼女をモデルに頼んだのだった。

しかし、自分の自由になるモデルを得たことで私は初めてポートレートの難しさを味わうことになった。

撮影会ではろくにモデルに近付くこともできないため、顔をアップで撮るなどと言うことなど果たせなかったが、それが可能になった今

「ポートレートは、『富士プロマイド紙三号』で焼けるようなフィルムに仕上げなければだめだ」と、先輩に言われた言葉の意味が理解できた。なるほど四つ切りなど大きく伸ばすと、まず、粒子の荒れ、ネガについたと思われるごみなどの傷が気になる。と言って、ネガを乾かすのにゴミのない環境をつくることは意外に大変だった。早く乾かそうと思い、風のあるところにさらすなどは論外だった。

さらに、この印画紙は柔らかい印画紙でポートレートには最適だが、ネガのコントラストが強すぎても弱すぎても、肌の感覚は失われるので、露出のバランスがとれた階調のネガが求められるのだった。明るい太陽のもとで、レフレクタも使わずに撮った写真などは陰影が強すぎるとも写真にはならなかった。それに、覆い焼きなどの姑息な手段で凌げる範囲は限られていた。

私は、赤電球の下で、現像時間と露出時間の関係などをテストしながら試行錯誤を繰り返し、現像液の中から徐々に輪郭を現わしてくる彼女の姿を求めながら自分の意図した彼女が現れてくるのに夢中になった。それは初め、純粹に狙い通りのポートレートを作ろうとする行為に熱中していたのだった。

彼女は、細面で幾分ちじれた髪を後ろに結ぶ小柄で華奢なあどけない少女だったが、切れ長の目はどこか寂しげだった。母子家庭と言う先入観がそう思わせたのかもしれない。

このように彼女をモデルにして様々のポーズの写真を撮るようになるとはとするとほど美しいと思える写真に出会うことがある。その頻度が徐々に増えてくると、私は、赤電球の下で次第に輪郭を現す彼女の姿に、しだいに惹かれていくのだった。

高校時代からその少しさびしげな様子が、可憐に見え皆の人気の的であったことは知っていたが、当時、あまり褒められた成績でない彼女を、私は優等生タイプにありがちな、『白痴美』と、軽蔑した態度でいたのは確かだった。

しかし、素直に彼女を美しく感じるようになっていた。

「ね、哲くん、新宿御苑など公園にもいったけど、一番良く行ったのは銀座かしら」

私が今日誘われたのは昔話のためか？など考えながら彼女の様子をうかがっていると、

「あなたは、『ランブル』とか『エチュード』などという名曲喫茶が好きだったけど、わたしあまり好きでなかったでしょう。曲が嫌いと言うわけではなく、あのもっともらしい顔をして聴いている雰囲気嫌いだったの。とって『銀パリ』が好きだったわけでもないけど……」

細身のカルチェのライターで火をつけたが、吸おうともせず灰皿においた。

私も会話が途切れるのを恐れ、

「『わが青春のマリアンヌ』、覚えている？」

彼女は、わずかに頷くと、「少女が、野生のシカの大群に踏みつぶされる映画でしょう。すごくよく覚えている」

「題のわりに少し不気味な映画だったね」と、当時の彼女を思い出してみると、映画や文学であまり趣味が一致していなかったのを思い出した。さりとて、ダンスも全く下手だった。

今思うと、彼女と何を話していたのだろうかと思議になる。多分、美しい女性を連れているのが、男の甲斐性と誇らしげだったのだろうか。趣味の不一致などの不満を充分埋め合わせるほど彼女に惹かれ始めていたのだったろう。高校を卒業してまもなく、女性にまったく免疫性を持っていなかったのだから当然だったのかもしれない。

このような他愛もない交際が一年ほど続いたのだろうか、大学二年生の春休み彼女は「婚約しようと思う」と、私に告げた。相手はと問うと「牧原さん」と応えた。

牧原仁、二年先輩の体操部員、鉄棒の名手で高校生離れした華麗な演技は女性の人気の的で、放課後体育館で彼の鉄棒や釣り輪の練習に興味を持つ者は多かった。事実、白いトレーニング・ズボンにランニング・シャツ姿の彼の肩、腕の筋肉はたくましく、短く刈りそろえた髪はいかにもスポーツマンらしくすがすがしい。幼顔を残す彼のマスクは一種の甘さを漂わせていた。『ハンサム』と言うのに異議を唱える人はいなかった。

私も彼女が牧原と付き合っているのは薄々感じていたが、体育系大学の彼と一流のP大の私では格が違うとひそかに自ぼれていたのだった。

私もプロポーズしたらどうなるかと考えないではなかったが、まだ人生の入り口に過ぎない時に、そのような決断するのは躊躇われた。

(この広い空の下のどこかに、もっといい人がいるさ) と思い、何も言わずに別れた。

カクテルグラスを手に私を見つめる彼女は、顔は入念に化粧され年齢をカバーしているものの、さすがにのど元には年齢相応のしわが刻まれ、深く切れ込んだドレスの胸元から覗く胸の谷間はすでに弾力性を失っていた。昔と全く変わらないやせぎすの体は、若い時はスリムとを感じるが、歳をとるとぎすぎすした感じがし貧弱に見える。それを補うかにネックレス、ブレスレットで飾っていた。そこには昔の可憐さなどはなく、世間の男性どもをあしらって生きてきたふてぶてしささえ感じられた。

彼女は、保険の外交のこと、今でも一人でいるなどと語りおえると、まるで神父に懺悔を終えたかに晴れ晴れとした表情で正面から私を見つめた。

「もし、あなたとあのまま付き合っていたらわたしたち結婚していたのかしら？」

言い終わると、私の表情をうかがいながら手にしたカクテルを飲み干すと、答えを促すかに私を見つめた。

これは意外に難しい質問だった。つまり、結果論からみると、今の家庭に満足しているので躊躇なく否定の言葉が出るのだが、結婚相手は必ずしも同じ時系列の中に現れ比較、選択できるものではない。従って、初めに現れた雅代と全く可能性がなかったとは言えないと思った。しかし、その後多くの女性と付き合いそれなりの鑑識眼が育っていったのだから、多分、長く付き合っていれば、趣味や生活態度などの違いから別れていたと思う。

むしろ、あのような形で彼女が去ったのは、今になれば、ラッキーだったのではと思った。

あれは、まだ女性に対する免疫性が全く育っていない時期の通過儀礼だったのだろう。むしろ、長引けば互いの欠点にも気づき、悪感情しか残らなかったのではないだろうか。

しかし、そのようなことを今さら真面目に応える必要もなく、単なる昔話をしているにすぎないと思  
いなおすと

「多分ね。僕の好意は充分伝わっていたと思ったけど……」

「今までいつも、わたしって馬鹿だったと思っていたの。牧原はあなたと付き合っているのを知って焦ったのね。母は反対だったのだけど、母の負担を軽くするためにも早く結婚する方がいいと思っていたの。それに、あなたみたいな優等生のお嫁さんになれるとは思っていなかったし……。大体……。あなた、別れる時も何も言わなかったじゃない」

「大学二年生ぐらいで、将来も定まっていなくて結婚の約束なんてできるのかね」

私は、彼女が結婚を急ぐ理由が理解できなかったが、牧原の容貌に惹かれたと思うと、当時、かなり落ち込んだが『馬鹿だった』という言葉に『今さら』と満足していた。

「そうね、それがまともな考えだね。結婚してみてわかったのだけど、彼って非常に自己顕示欲が強かったの。だから、自分の格好ばかり考えていたもので、高校の体育教師に就職したものの、すぐやめてPTAで知り合った市会議員の秘書になり、政治家になるつもりだったのね。だから、わたしも婦人の集いなどにしばしば出席していたのよ。でも、議員の秘書なんて議員が落選したらおしまい。だから、別れるともいえず蒸発してしまったの。未だに行方不明」

このような話をしながらも彼女の意図を探ろうとしたが判然としなかったが、昔話をしている分には罪がないと安心していた。

彼女は今まで飲んだ割には、あまり酔った様子もなくお代りにギブソンを注文すると、身を乗り出すと声をひそめると、

「あなたに、一度だけ抱かれたわね」と囁くと、ウインクした。

あれはマスターコースを終え、A社に就職した確か二年目の秋だった。全学での同窓会が催された。もう、立派な社会人になっていたのだから、盛大に飲んだ。あと雅代も含む数人で二次会、三次会……は覚えていたが、気が付いた時はかなり酔っている雅代と二人だけだった。

彼女が離婚したとか、子供は母親に預けてあるとか言っていたのは覚えていたので、一人では危ないかしいと、彼女をタクシーに乗せ部屋まではこびあげたのだった。

あとは、彼女のペースですべて進みことは終わった。

少女のような小ぶりな胸だった。

「ね、あの時あなた……、童貞だった？」

「君が最初の女性かと言う意味？……。難しい質問するね」

私は、質問をはぐらかそうと思った。嘘をつくことも、黙っていることもできたが、彼女のなにかさがるような眼差しにたじろいだ。

「応えにくかったら、黙っていてもいいよ」

この言葉で、おぼろげながら彼女に誘われた意図を理解できたが、少しためらった。

降り出した雨が、窓ガラスに斜めの軌跡を作り降りかかると、その水滴が視界を遮り、遠くに見える港の小さい船の明かりを霞ませていた。

私は、あらかたなくなったグラスを取り上げると残りをあけた。

「そう、童貞だったよ。君が初めてだった」と応えると、雅代は嬉しそうに椅子から身を乗り出すとテーブルの上の私の手に重ね、私の表情をじっと覗き込むと微笑んだ。

それは、素晴らしいプレゼントをもらったと言いたげな顔だった。他の誰にもわからない笑顔で感謝に満ちたもので、いきなりあの時代が戻ってきたみたいだった。

ゆったりともたれこむように椅子に座りなおすと彼女は、

「そうだと嬉しいなと思っていたの。あの時もあなたの初めての女になれたらと……。それにいつもそう思うようにしていたの……」

しばらく二人とも黙っていた。

やや離れたテーブルでは、若いカップルが話している。時々、女性がうれしそうに笑っているのが見える。

再び口を開いた彼女は、

「女一人が生きていくのは大変なことよ。でも、ほんとに愛していたのはあなただけだったと思うわ」と言うと、満足げに微笑んだ。

「今日は、わたしの六十歳の誕生日。何よりの贈り物ありがとう」

幾分涙ぐんだのか、目元にハンカチを当てた。

いつの間にか、客は若いカップルと二組だけになっていた。

帰り際、玄関でタクシーに乗るとき「送ろうか？」と言うと、

「ううん、今夜は一人で大丈夫」と、タクシーに乗り込んだ。

彼女の車の赤いテールランプが見えなくなったとき、もう再び会うこともないだろうと思うと、なぜか悲しかった。

過ぎ去った時間が無性に恨めしかった。

私は、まだ降り続く雨の中を、その車の後を追うように歩きだしていた。

(2008-11-11)